

『笑って、つないで、さようなら』

「往生際が悪い」とは、いろいろな場面で使われますが、「死に際が肝心」な良い証拠だろうと思います。

では何故、死ぬ瞬間の心配をしなければ気が済まないのでしょうか。人によつては、死ねば解ると達観している向きも有りますが、そう格好良くはいきませんよね。

それでは、皆でじたばたしてみましよう。まずは、生きてる内は無病息災で、養護老人ホームの頭金と、病院での治療費ぐらゐは貯金して、お葬式とお墓の費用は、自分では見れませんかから目をつぶつてやり過ぎします。

次に、逝く瞬間に痛いのはいやですよ。ポックリ観音さまにでもお願いして、安らかに夜寝て、朝に成つても起きて来なかつたぐらいが理想でしょうか。

逝つた後の身の振り方も担保しておきましょう、閻魔大王さまに生前より良く相談して出来れば天国へ、無理なら出来るだけ辛いお仕置きで勘弁してもら

えるように頼んでおきましょう。

さてどうでしょうか。これだけ準備をすれば安心でしょうか。何か足りないような感じがしませんか。それも一番大切な何かを。

思春期の頃に、人は自立するため、「自分は、何故、自分なんだろう」と、自分の存在理由に疑問を抱きます。大人になつて何となく曖昧な内に妥協して忘れていきますが、反対に明確な答えを出している人が居るわけでも有りません。

お大師さまの、とても有名なお言葉に「生まれ生まれ生まれ生まれて生の初めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し・・・」と云うお言葉が有ります。

大恩教主のお釈迦さまも、命と時間と空間の顛末には、一切の見解を残さず、その生涯の姿勢を答えとして示されました。

始まりも、広がりも、その終わりも、未だに変化し続けているこの瞬間に、私たちは、稚拙な経験の元に、いったい何を解決しようとあがいているのでしょうか。

問題の解決が、人生の解決につながり、逝くための準備に成るのででしょうか。死を迎えるのに、資格は必要有りません。偏差値が高くないと死ねない訳でも有りません。必ず逝く時期は全員にやっけます。

つまり、誰かに答えを求めめるのではなく、自分の答えを一生かかって決めていかなければ成りません。成功や失敗では無く、どうすれば納得がいくかどうかにかかっています。

もうすぐお盆の時期となります。ご先祖さま達は、私たちに命を託すため、暗中模索の中を力強く生き抜いて、立派に旅立たれました。

学ぶべきは成果では無く、事に対して雄々しく立ち向かった先人の勇氣。そして、苦しみながらも諦めずに、この世界を残して頂いた事への感謝のところに尽きるでしょう。

平成24年孟蘭盆会

修詮記